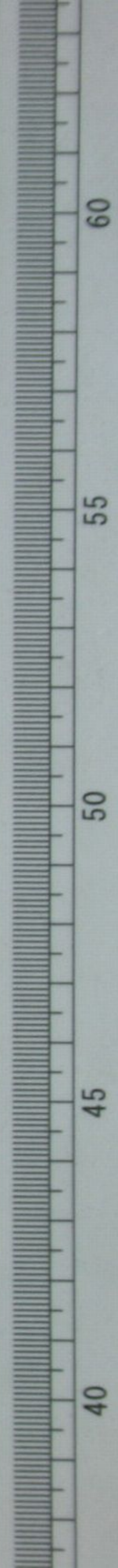


阮世純崔

中村俊定文庫

文庫 18

887



北総境町文哉難陳

雙雀叟贈湖宿同盟文

俳諧龍雀

文哉再陳

翠色軒

雙雀社裡三子辯破

濤亭藏版



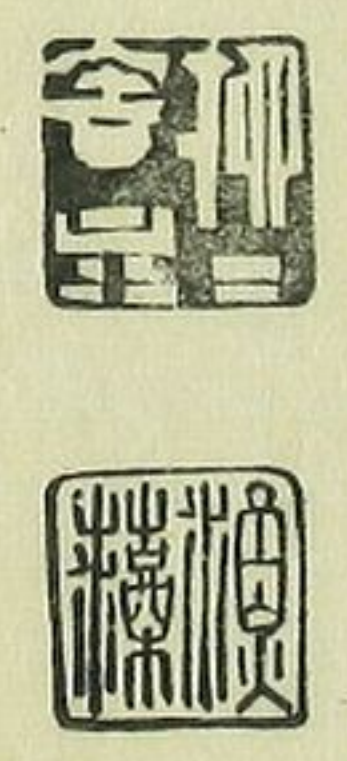
此のありまじりのむら 古刀拵とて我子心
 肝の流うとらるる手よく利くもの如くも
 刀も人斬る時人の所刻もは
 かる心あるよあはれとて物も人走る
 とらへもたえぬくもたあ新うりや
 らのえとそけいともたうら小孫の文哉とふ
 ものこ鳴呼かふ業とて昔在申文の利かふ
 其向う少哉ひとて物も人走る
 心も物哉とて心相もを好つと古垣
 なる然く儼月一を飲るぬくとに
 ろとくぬのの紙乃とて持もて獨車



昔々〜の頃〜
 二子も〜
 一〜
 二〜
 三〜
 四〜
 五〜
 六〜
 七〜
 八〜
 九〜
 十〜

物と舎漢藻

辛夷のよ〜



世の文哉と云



余々〜
 僧の形〜
 の多〜
 一〜
 二〜
 三〜
 四〜
 五〜
 六〜
 七〜
 八〜
 九〜
 十〜

山雀〜

旅少く旅多し〜〜の月を先ふ〜因ハ其來留ル花を
 修〜のそか〜も其ハ柿柿を著〜月其宜ル
 雅の志をう〜年毎ハ一高〜ハ世遠リ然としま
 ち〜松竹一派の家通あり志を弔ル一辭の致授り
 亦ハ去年の冬十返を幸〜ハ其高き刺柿其高
 ち免茶人の眼其〜も志め〜ハ其を去〜
 虚言其との齒其〜ハ其〜も彼十〜
 此をりけ〜〜も其おす〜

十〜
 塔名書

一 雲うらぬ松の名〜
 一 松

入船も唄〜
 門岸〜
 約束の月〜
 名〜
 何〜
 糸〜
 以〜
 其〜
 瓜西瓜〜
 お横場〜
 當分〜
 〜〜〜

栗折
 如石
 柏茂
 孝身
 又子
 蘇丸
 千常
 思女
 其月
 栄儀
 た好
 事

土手外の畑も出ればつらき
 原居なるやみ野卵堂にむ
 附たる小島も花も出出し
 きの静きもさるの夕も暮
 持まらぬ銀籠を頼まら
 漕舟より船をささる機橋
 連合もかまのつら子の水も
 祝義ありき若く生 碎
 ろくそくもつらき湯をこぼれ
 湯屋の柳も江中をささる
 肩凝りもさる程も助言如
 お角持もさる程も助言如

松 折 石 茂 春 好 丸 子 照 常 年 雲

十数日間の難役五尺雲をささ
 うさく小島もささるも 杖
 ありきもさる程も助言如
 罪もあやあまの冷もれ
 岩草の味もさる程も助言如
 雪もささる程も助言如
 餅もささる程も助言如
 十数日間の難役五尺雲をささ
 春の空も友もささる程も助言如

茂 石 折 月 好 子 雲 春 年 儀

北鑑の註
 一 散るもさるの山もささる程も助言如

うらみし妹おねはまきかき

一 身三おねはりて当又おあり何なり

一 四句目あまきとちまね又よきまきとまき何れおね

らうゆふまきとちまねあるまきおまのまきとまき

雲の載しとちまね世まき何なり

一 同厚ハ五句去の法武あり四句去おてゆき

法ハおねお

又兼味しと云一解中兼味は徒の悪言且二謂ふも自負の
世十より兼味ハ一おね病兼味本後の度兼味あまき何れ
伴の能ねとて夫おねとてあまき中おね兼味とてまき三近
心何の兼味とて一おねとていふ一兼味をねて兼味おね
りおねとてあまき本万兼味おねとて兼味兼味とて兼味

根を枯く申お獨りあてまきと十年の色城り

多目出度松の歌おねは一ふ一の山ちあまき山とて

心何の兼味とて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

富士山類中一とて一とて一とて一とて一とて一とて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

おねとて一おねとて一おねとて一おねとて一おねとて

富士ありも此の船は其速向中洲川ありて一山川の
新しき船なるは古今未嘗あるの事従たりを能く在
のたより

熱海三浦山

海多し船るを舟のつれあり

津中船をあらう

二百年我此山お弁あり

山お門ありあり

より何しし富の人の出也

多路あり瀕り山あり

又買三お船行りて船船ありて如何におありて

隘のちありあり

まともおありあり

用ありて相ありておありての舟ありておありて去来あり
えーおありておありておありておありておありて

おありておありておありておありておありて

十二枚集

船をあらう

おありておありておありておありておありて

おありておありておありておありておありて

おありておありておありておありておありて

御白紙ありおあり

蘇の枕

おありておありておありておありておありて

おありておありておありておありておありて

祖翁六禪居士のまじりしるしに六 湯のうらみさきしるしに
ともおもしろくもまじりしるしに 回廊の人のゆきしるしに
おもしろし

系承三日月雲障目

氷毒已

関 扇
孝 手 諸 兄

すしりしるし

余の友甚本ぬし あはれ 神名月の末のうら

あはれしるし いさむりしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし あはれしるし

當分ハ洋々あると云ふ事母の御つぎ遠く
當分ハ洋々あると云ふ事母の御つぎ遠く
つまじぬ類のきつゝうそをいふ

土手那の細も出水ゆつゝねー。 松 哉

臣居侍りしお雛卵笑ふむ 柳

附るる小童お花をう急直し。 石

此お八重の字にうめ直の字ありては
へ直とての字も偏く御つておとこの後字ふとて
さきハミヤ

持ぬく以程お花をねまて 孝 哉

潜出るる船をうそを棧橋 好

詞の世を返つて草もも方言お花をうそとては
あまりの俚言おとこをうそとてハ一向おとこをうそとてハ
つとてあまら人も何田舎あまらも左つとてはさや何
只呼吸もいふ所も遠くおとこをうそとてハ
他ありし朝酒をの免とてお花をうそとてハ

つとて他とて因し御つては
とては遠くとては年竟同字をいふとては
おとこをうそとてハ

連合お花をうそとてハ取士をうそとてハ 丸

祝儀お花をうそとてハ生 碎 子

端燭お花をうそとてハ雲をうそとてハ 思

浴衣お花をうそとてハ五色をうそとてハ 常

三白の已り進口をうそとてハ
何とては

肩お花をうそとてハ其名も助言子 哉

此何事かおとこの御つては
おとこの御つては

折角お花をうそとてハ愛をうそとてハ 春

是新愛の難役五足事をうそとてハ 哉

薄心小娘をうそとてハ手 拭 石

こゝろ〜と踊るあふ月のあ 柳

一部をのりあるあきりの空をれ 月

秋の空をれとて... 空をれとて... 秋の空をれとて...

岩の峰の味を自惚れぬ 好

なろう〜と空をれ 流をるれあふ 子

雲白ふ然をたるりけ 雲

小巻まは白ふ然 肩解又下種 ぬき 原居連合
あふ〜と空をれとて... 流をるれあふ... 雲白ふ然をたるりけ... 雲

餅あま〜と空をれ 振ぬあふ 春

十ふれ花の日和も 花 春

氣のりけあふの振ぬあ 花 春

早急一巻の振ぬあ... 早急一巻の振ぬあ... 早急一巻の振ぬあ...

日陰をのりあふり... 日陰をのりあふり... 日陰をのりあふり...

ていつの日か女を令に能に問答するを雀を母とあは
しめしは一とあるらん侍もふ所習把酒た令ふは受四討且
ち家を負強作富貴相もたおめてかひのう截ういれし
侍のいれもさるるらん侍もあつてかあつて痛く甚な
侍も師を對して小辭を張るらん侍もさるる若き
の爲にもいれらん侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん
しと程も思ふらん侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん
て我輩今もさるらん截ありし侍もさるらん侍もさるらん
侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍も
侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍も
侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍も
侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍もさるらん侍も

維ちりりゆゆかかののううをを備備のの人のののゆゆ傳傳てて再再びびああららぬぬかからら
 ややううとといいふふももいいふふををせせししてて舞舞をを進進めめるる一一場場のの信信説説と
 ありありししてて折折々々とといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 形形ととありありししるる名名をを當當てて楷楷書書とといいふふ事事ももああららずず
 ことこと大大ききとといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 ううけけてて乞乞児児とといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 申申すす事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 備備わわるる事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 事事ににああららずずとといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 信信ずずとといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず

嘉永三度戊午十月廿日

一 儼 日 喜

儼げん古こきき採さい卷巻序序

洗せん灌くわんのの類るいふふるる古こききとといいふふ事事ももああららずず
 咄つづつつのの類るいふふるる古こききとといいふふ事事ももああららずず
 ありありししるる名名をを當當てて楷楷書書とといいふふ事事ももああららずず
 難なん保ぼれれとといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 古こききとといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 事事ににああららずずとといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず
 已い角かくのの儼げんのの類るいふふるる古こききとといいふふ事事ももああららずず
 ひとひととといいふふ事事ももああららずずとといいふふ事事ももああららずず

觀くわん自じ堂たう
 一 松

双園の法沙日とて人びとを驚かす事なきの事なり
教ふべしとて田舎を去りて出でて人びとを驚かす事なり
乃ち心ゆく事なきの事なりとて心ゆく事なきの事なり
さうもあはれとて心ゆく事なきの事なりとて心ゆく事なきの事なり
らあはれとて心ゆく事なきの事なりとて心ゆく事なきの事なり
字の扱の件訛ハ彼と云ふ事ありて心ゆく事なきの事なり
筆の整りて右と云ふ事ありて心ゆく事なきの事なり
訂正も筆多の事ありて心ゆく事なきの事なり
も筆に云ふ事ありて心ゆく事なきの事なり
かまハ筆工と云ふ事ありて心ゆく事なきの事なり
目を通さぬ事ありて心ゆく事なきの事なり
多しと云ふ事ありて心ゆく事なきの事なり

曾呆然り

舌より雀と云ふ何と云ふ事なき師の別号の双雀と云ふ
と云ふ思ひと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
名も命もと云ふ事なきの自他扱の顛倒ありて心ゆく事なき
多しと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
且此終る文字なりと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
しと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
双根の扱の件ハ此と云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
さうもあはれと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
根と云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
舌と云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なきと云ふ事なき
雙雀と云ふ事なき

新故古交... 時の時を... ねん... 新古交
 と... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...

新故古交... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...

新故古交... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...
 ... ねん... ねん... ねん... ねん...

あゝは部、統より界まで玉篇のふものもさして――
惣て一團、惣後をも統部として――
女部をいふ、相も何とも思ひぬらぬ

白のわしを三章とふも、三章後しては篇とある

句のわしを三章とある、三章つめて篇とあるとて、
世はゆい、わしを三章とある、素より、
を三章とある、師も、三章の字を、
白のわしを三章とある、
三章とある、
あゝは部、
こゝろ、

高車三三章、章六句の如き、是より高車乃三

字より、
高車乃三三章、

爲車乃三三章、

此の字は、
爲車乃三三章、
爲車乃三三章、

或は、
或は、

志しそ人をもかゝるも形あり師の板屋の行も道と歌せし道
一八がしきし久おとわがし穿たると小強の因縁對しその
縁縁ありおとよりかめ相更さるる人との因縁ありしを
持ててと年ふき山猿の智慧あるまのしやうしと道前小
飯外理とつる五義のむらつるおの道と書ふし謎坊主
あつて維六解んとくそむむし^{ツハキ}をなすもの形しけや

桃青八祖翁の佛諱とも中屋をいふあまも^{カニキ}軌を
履てそ^{カニキ}様をかくららそそか^{カニキ}桃青を諱と書
とも名ともあふらゆしそ龍南端の言葉と吐き佛
諱と天子小取とつるあま諸候^{カニキ}をいふと書
るありきとふらうし宗房八諱とも^{カニキ}一^{カニキ}桃青を
諱とありし世は五老井の風俗又道とつる書あり

石をいふまゝにたれ他者別傳をいふせり傳り白
馬桃青とつるまゝに傳るまゝに人小書しそ
書を初とつるまゝに桃青と書しそとつる
形ありけりしや

師の佛諱ともしきとつるし首龍南端とつるし
まゝにおの道と心のいふしとつるし^{カニキ}宗房八
いふしと書し命をたつるし^{カニキ}時の高諱とつるし利敷の後
をいふまゝに世諱とつるしとつるしとつるしとつるし
秘ありしそいふ自由の甚高極のつるしとつるしとつるし
士のまゝに書しとつるしとつるしとつるしとつるし
信又選もはとつるしとつるしとつるしとつるし
彼もつるしとつるしとつるしとつるしとつるし

此道云々水もまた世次の果を著しめて抄尾に在る極極
書と書ゆへにふまきき道に他より極極と云ふ佛道と云ふ
つては名もあらうと云ふは長つる一は果もあらず不道
のこゝろ道に云ふ極極と云ふ何と云ふ思ひもあ
きまらぬより師もは極極と云ふこと押さえて作道と
云ふもその道もあらぬ極極と云ふ道も極極と
極極と云ふ子もあらずいふ事極極の上のおとく極極と
云ふも極極其祖と云ふ事極極と云ふ私言も何と云ふ事極極と云ふ
いと物あらう極極と云ふ

極極書抄に以ての素生也して知名入金化後
右にありて宗房と名をふと云ふ
翁の傳を以て免るる書と云ふ事極極せんわりの

も極極と云ふ事

子孫子の序に韓子の言を引きて曰甚意以是傳之
之舞に舞以是傳之島

昌極の此言抄に彼等知ることあり極極と云ふ事極極と云ふ
あはれ事之といふ文字道に云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ
故也下はかくいふ事極極と云ふ

祖翁曰千歳の後も愚老も血脈行きしりしりを知る
と云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ其正法骨髄も悟入し
風骨の事極極と云ふ事極極と云ふ其正法も悟入し
祖翁より傳つた事も其意の血脈道統の門人
と云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ
極極と云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ
事極極と云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ事極極と云ふ

後も其道の下流は沐浴を以て書てもさうかゝる所の
根根生をさうかゝる所

鬼神の神靈ありて神靈を以て書てもさうかゝる所の
たゞの御座りも祀るの像をけりて其を以て
殺すのみなり

何れも御座りて其を以て書てもさうかゝる所の
益ありて其を以て書てもさうかゝる所の
顔倒のめりて其を以て書てもさうかゝる所の
何れも御座りて其を以て書てもさうかゝる所の
かゝる所も其を以て書てもさうかゝる所の
初らうて其を以て書てもさうかゝる所の

神ありて其を以て書てもさうかゝる所の
かゝる所も其を以て書てもさうかゝる所の
のりも御座りて其を以て書てもさうかゝる所の
老杜の御座りて其を以て書てもさうかゝる所の
かゝる所も其を以て書てもさうかゝる所の
達磨の御座りて其を以て書てもさうかゝる所の
達磨の御座りて其を以て書てもさうかゝる所の
五臓の神ありて其を以て書てもさうかゝる所の
かゝる所も其を以て書てもさうかゝる所の
唐山の神ありて其を以て書てもさうかゝる所の
神ありて其を以て書てもさうかゝる所の

やうく極まるもつゝもあれ〜 兼一イナキヤ 家を教ま〜

文章端古のりく許る源氏授意の多しひを察し兼
そとすへりりもなきあまふともか委是委の之法は
しして極此文章の格式一とあり〜と云くをいふ能
此に世百通俗のりも其すの辭め云て媚論を以
ててそのの機〜も〜能〜

媚論ヘイロンのり使のり也文章は媚論なるも六つも好ま
ざるを綺靡キビのり〜と云く

俗中の俗をまねるは是れも俗に成行は深遠風
骨をいふ要も〜と云く 鄙言めもせし拙まめせし
委是教の家の雅をいふ所 恥くするもいふ

鄙言めもせし拙まめせしと云く 意通〜

てもゆるさ〜 望もも掛子も投出〜 ねそせ〜 やさ
あふ〜 大言をいふもあふ〜

彼をいふも綴續をま〜 官女の世兼延は
し〜 本極の意をいふもいふ〜 心こゝろをいふ
是れは世の落名の中にあふ〜 あ〜 心は〜 仇
此まのりも之れめ〜 意味〜 俗文選
と源氏授意の之法は〜

彼合ふ〜 譬のりも喩も〜 書画〜 委是兼延
續る極此は兼延のり〜
心こゝろをいふもいふもいふも〜 俗文選
中ゆるる人の風をいふもいふもいふも〜
のりもいふも眼孔ゆるるもいふもいふも〜

筆を掃きしありしとふれ引墨をせし世に字行り
てい筆をふらぬと申すも如く考へ拓魂賦に
云ふと一神を自十口行りし御魂の由をと書きたり
と云ふも考へる能はざるやと云ふ

拓魂賦に賦せしと云ふは其年某月某日と詳しある
しと云ふも一今年今日と書し然し其書を文書一
と云ふも何れもつたふと云ふは其年某月某日と云ふ
あると云ふ考へるも一拓魂賦に賦せしと云ふも
其年を痛めせしと云ふも考へるも一と云ふ

いふは拓魂賦に賦せしと云ふも考へるも一と云ふ
と云ふは拓魂賦に賦せしと云ふも考へるも一と云ふ

拓魂賦に賦せしと云ふは其年某月某日と詳しある
しと云ふも一今年今日と書し然し其書を文書一
と云ふも何れもつたふと云ふは其年某月某日と云ふ
あると云ふ考へるも一拓魂賦に賦せしと云ふも
其年を痛めせしと云ふも考へるも一と云ふ

拓魂賦に賦せしと云ふは其年某月某日と詳しある
しと云ふも一今年今日と書し然し其書を文書一
と云ふも何れもつたふと云ふは其年某月某日と云ふ
あると云ふ考へるも一拓魂賦に賦せしと云ふも
其年を痛めせしと云ふも考へるも一と云ふ

拓魂賦に賦せしと云ふは其年某月某日と詳しある
しと云ふも一今年今日と書し然し其書を文書一
と云ふも何れもつたふと云ふは其年某月某日と云ふ
あると云ふ考へるも一拓魂賦に賦せしと云ふも
其年を痛めせしと云ふも考へるも一と云ふ

ともあり又云西よりの所は其の院より右の二丁
おしを不刊しともさしともしりともおもつともおもひめ
ふりや

祖翁の今既ぬおしめぬるをてしんかきり
スツテニいふを教を既の義ぬり多し
乃かきりしを徳ぬ出せしりぬし心もわ文哉しんかきり
テニ死又の程ありしりぬし心もわ文哉しんかきり
を河の浅しりおもわしりかちもわしりぬし心もわ文哉しんかきり
わしりしりぬし心もわ文哉しんかきり
多しぬしりぬし心もわ文哉しんかきり
我祖権の鼻先のおりぬし心もわ文哉しんかきり
のふもまをまうしりぬし心もわ文哉しんかきり

まりやうかきりぬし心もわ文哉しんかきり
と徳しりぬし心もわ文哉しんかきり
神也のぬ子のぬし心もわ文哉しんかきり

お考千端おぬぬぬし心もわ文哉しんかきり
こしりぬし心もわ文哉しんかきり
ことしりぬし心もわ文哉しんかきり
ぬし心もわ文哉しんかきり
又西行撰集おぬぬぬし心もわ文哉しんかきり
いふ山里ぬぬぬし心もわ文哉しんかきり
よむ河に神也のぬ子のぬし心もわ文哉しんかきり
きあしりぬし心もわ文哉しんかきり
ハ後日河院のぬ子のぬし心もわ文哉しんかきり

新改の女ありて其の字をなを辱たてし如きも一尋
よよむ可しニ案院の撰成し滋難しと云ふ事ありし
此後信の田上といふ山里に住ありし田上といふ山里に師大綱云
の住ありしといふ事ありしとて其の書しし筆跡ありし
形り殊に世に道なき住りて其ありて信信の山荘の田上
ありし住ありしといふ師大綱の田上の住居といふ事ありし
うかしくやうの居ありし神は佛もいふ事ありし
の文字力も所ん後のニ案院おれし事候にニ案院のいふ人あり
後波らまはしニ案院の撰成ししといふ彼は信信を由るおの事
つしむるおの事か

是は案院を以てしよき事候神の石の人を以てし
か

つしむる外自れも亦案院の目もあはし
物事のこ
心
字の傷
神の事候の事し引出さるる事候は
り
此の文字の事候の事し引出さるる事候は
し
白
も
引
り
り

もは出さ也

其名もさういふ一書さういふ云葉の種さういふ草の力さういふ
こゝろ序文も併せし海福徳の唱ひも併せて佛文共
ひても願ふべき妙さういふやういふ

高山記と引く縁結さういふ牛も書も縁結さういふ香山記と
引く縁結さういふおれさういふの向ふも惟徳福徳の兼弁競
醒種さういふ醒種も徳の縁結さういふ彼文哉さういふ縁結さ
りひぬさういふ折れ折れ燕猫は狸さういふ物さういふさういふ

おれさういふ松の名さういふの山 久保

茶本茶名をわらうさういふ根さういふさういふ茶と音
の中の時さういふさういふ君子の標さういふさういふ
おれさういふさういふ千葉とさういふさういふ松さういふおれさういふ

さういふおれさういふ

冒霜さういふさういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ
や

或人、詩、秀、出、王、夏、茶、名、不、欲、隔、松、樹、緑、葉、亦、山、光
相映、自、茶、趣、か、さういふさういふさういふさういふさういふ
せ、さういふさういふさういふさういふさういふさういふ

此詩に誰人の詩かさういふさういふさういふさういふさういふ
ん、茶、名、不、欲、隔、松、樹、緑、葉、亦、山、光、
主、は、他、も、さういふさういふさういふさういふさういふさういふ
い、さういふさういふさういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふ

さきさき晴し〜夕日の朝

一巻

夕暮此編ハ日の字朝の字とそふ事此大切の字眼意
能く知るも士尊ハ世を極く蒼天と云ふ日目の
もよをうつと云ふ〜そを〜お村々のあはれ禁すり
そを極く〜けり〜山も極く〜むらぶ〜の根
世の朝日日出〜の朝日ハ行ふもけり〜
今もむら〜晴集え〜つ〜晴集の双紙も大風の吹〜
あまひ〜〜免〜〜つ〜遠の〜〜
多〜あ〜〜人〜〜絶倒〜世散白編の終〜
被双身の〜と〜も〜〜つ〜遠を極く〜心〜い〜
の〜〜〜ふ〜〜中平念〜行〜あ〜
あ〜〜起〜〜〜〜〜〜日の子孫〜

あ〜白解〜

入解 晴し〜朝の雲をけり

雲柳

世極の先陣も〜〜久遠なる事〜君身共〜
〜〜〜〜再筆を〜
徳白とたぬ事〜

六月廿日 山本坊おつて

あ〜〜〜〜風の色 翁

何れ〜人の〜も〜 呂九

川 ぬの〜〜〜 曾良

あ〜〜〜山〜〜の〜
あ〜〜〜の〜〜味〜〜
〜〜〜〜の〜

下巻

んまう〜い〜い

是哉の唐山水油〜い〜い

おま

千聲啼〜い〜い

其角

船い〜い〜い

枯風

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

こち前き母のあつ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
野〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

固め〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

身三の太意は起信野の坊あま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
あまのうは〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
母野〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

起取轉合〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
物川の箱〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

おのま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
おのま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

おのま

たおれらへんを歸せしむるはたゞの事なり
ことごとく

愛おむる目のあるはつらつと六散の程の意をされ
まて身三昧の附をさしつらつとあり

四百目のありはつらつと

きこむる前白の控格をさしつらつと
母の變化をさしつらつと

前白の控格をさしつらつと例の通解を

門をさしつらつとある化ありは五百目の約束の目
んおまゝの風通人も前白越へのおほをさし
そかまゝ人の白意ハんのあふさしつらつと
しつらつとある他の扱ひもさしつらつと

一層泥のお遠のその浅^{ゴツク}互角にお出せし引裂るはつらつと合
掌とも観音をさしつらつと

あるハんの利淫をさしつらつと約束の月をさしつらつと
雅くしつらつとある化の意をさしつらつと
世の中の手控をさしつらつとある後白の意をさしつらつと
附合はたのうお村のをさしつらつと

轉のまをさしつらつとある奪^{ヨク}の附をさしつらつと
めたあをさしつらつと

草のうらつとある中の者 若草

新巻のうらつとあるはつらつとあるはつらつと
うらつとあるはつらつとあるはつらつとあるはつらつと
うらつとあるはつらつとあるはつらつとあるはつらつと

何と前未だ金多き如く銀のうづまといふの解きしゆ急
の道解あり

流流の如く信頼もあき仕舞 文子

世陳未だ金多しある玉方の名信状きんてまふり
さういふを能くしきよふ自分の意味は押あそく
いふべきんまもたつてくそ又遠ていふくみ使ひさげ
ともありあし解き未だ未だ解きしりし初め
此年未だ成て未の跡もなき世陳の字も多しゆふ解の
裁しふとく是は令々古人の足跡しあきふたね鑑と
まきまのぬらけ大切の秘傳ありし筆跡も後ら
しし能前のもし一応のふ附合の運びを信後
まき

何と前未だ金多しある玉方の名信状きんてまふり
裁めし師の官く草剣の流うも也

何と前未だ金多しある玉方の名信状きんてまふり
ありしとく文字も遠い心もうまそ師も秘傳の伝ふ
かありしゆもこ也何しゆもあしゆのさるは信助も此
もとより伝名あり是は彼未だきぬもうあきありの流
家へんぬり

年礼を世師のト人お伺して 了寛

信信子かふ世ははもくくも 翁

持つらぬのち力をもおれくとも 湯子

八九百の巻 福来の川を一どけ愛おすあき 了寛

十もをうりの余はあつ出り 王圃

さうの葉舟小紙に記してあること

沾圃

頼りて少息病を治す事

芳躬

芝の端をさき草のうら粘

栄翁

梅舟出で初刺やす一頁六芒の内

菊

世内の字の少は縁に写さる小函の事ゆつて古の儀もて難し
しるめ小紙も小なる生数小紙は所の通称ゆゆす
あり小の字ゆつて一書刺舟初刺も初刺の地名ゆつて
縁の船舟を舂舂白鳥も大ぬお違せり

田沙舟出た刀尾落一あり一少なるゆつて小紙はとも同字
とゆるや黄書をも年さき白鳥くれ小紙は文字の借借ゆつて逆乃
字あり次ゆつて刺舟又同一艇の字あり一書刺舟文字をかり
あり何のき一合より人さきもゆつて一書刺舟をかり

さうの例の葉舟小紙

助舟に人偏利紙は古体の子舟舟あり一平光用後をさき
紙あり一そきも法舟の法をさき法舟さき一そきの
儀の教ありさき一そ境に大切なる心好む
ゆつてさき用後の子舟舟あり一そき法舟さき一そきの
としかかり

助舟に利紙は人偏舟もゆつて書舟舟もゆつて同字の縁も通連
ゆつてゆつてゆつて法舟に法をさき一そきの法舟舟あり
法舟舟ゆつてゆつて法舟舟ゆつてゆつて法舟舟ゆつて
ゆつてゆつてゆつて彼舟徒の教ゆつて大方の人儀をさき

葉舟にさきゆつて縁のさき

萩丸

ゆつて再ゆつてゆつてゆつてゆつてゆつてゆつてゆつて

うらまえてきりきりする白の自分のまじき女業の悔い
主のまじき世法本の中返すのけりきり男のまじき
おまじきまじきまじきまじき人情の風骨あり
いつか長〜〜〜時〜〜〜も一まじき人妻の意そのまじきまじき
まじきまじきまじきまじき又人情の風骨まじき新他意まじき抱
腹〜〜

うらまえてきりきりする白の自分のまじき女業の悔い
主のまじき世法本の中返すのけりきり男のまじき
おまじきまじきまじきまじき人情の風骨あり
いつか長〜〜〜時〜〜〜も一まじき人妻の意そのまじきまじき
まじきまじきまじきまじき又人情の風骨まじき新他意まじき抱
腹〜〜

南方をまじき降〜〜〜の月のお
左好

世の通用のまじきお悔い〜〜〜の降〜〜〜のまじき
けり又當年のうらまえて〜〜〜の元日より沙走
の悔い返す〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
後七の月〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
あり白意のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
亦まじき〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
おまじきお悔い〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
まじきお悔い〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
師のまじきお悔い〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走
〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜のまじきお悔い〜〜〜の元日より沙走

の希列 あめあらしきく小児ゆもおとまて鳴呼の者うか

土手外の棚も出水ゆつうふり
松

隈居住りの中籠卵実あむ
柳

附つる小魚もさむう名ふり
石

一節哉
かみり

ハ古人の化例めくも毎の字並の字あふ
さくもあつてゆめゆめなる去らう

ハ能事をもてしと只な毎廿三をあけてあむもの
依通

書ハまり三丈又選うつ
遊刀

座録おーやふ益のうる者
呂房

おきくうる氣を終ゆあむり
翁

新道のき
二書ゆ出て土益うまを遊あし

あま中ぬ月をきえらう
山店

神写のひろうりて海治もふり
翁

古集をくるとんてしと字並の字を引出き

あつうるにしも箱の種並の能事書ゆあふり

又選うりて出りてさうりてる備ゆも廉息ふり

古集の表書を覚きくことなるまふりて近き湖中一葉

集の表書を覚きくことなるまふりて近き湖中一葉

神写の向も海治もふりて古集を以味せしむ

又裁ハ徐りかき顔愚の少人のふもる

ハ備心ゆらわめもせんを海か

宵寝の月ゆりておもひ遠ふり

下りるうりておのきくさむおを遊けるも

漕舟を舟をともす棧橋

好

世味を先小末を後六六人のふかふかするもの
あり架うのふかき声しく呼とも海は聲しく
とつとも世をゆか折も隔てあるのふか六六の
るふか

師の二刀ありハカなりかきもいふふかすも何海

運合ふかたつてるのふか志ま

丸

統義もとりとのふか生 醉

子

熾燭もつたふかすす空の

照

浴衣の袖ふか折ゆかすの

勇

世味を先小末を後六六人のふかふかするもの
あり架うのふかき声しく呼とも海は聲しく
とつとも世をゆか折も隔てあるのふか六六の
るふか

き海——ふか去ふ——架かか水のかき——
秘しくえ縁のまき教つあるのふか——
時のむか流りとも正風の根にふか——
流るま——何れ何れか水の流りも正風のまき——
ハ正風ふ——物く——風流もふかのまき古々
となく——今ひ古きを今ひのまきもふかあり
鬼を獨り言ふも古風——ふかもふか——
ゆゆり求るも白紙のふかまき——
誠のふか折ゆか人のふか——
古のまきふか——世はふかをふか人の拵あり
るふか——
まき折ゆか——のふか三向のまき口まき——

角折りとは世の中をわきまなくとらふことなりと云はぬに
後二を海へあまも運ばぬかゝるもいふも由抄あすらねんか
是口と所と通し〜と云ふも我意の由かゝらぬ〜と云ふ
〜と云ふて運び扱ひ〜と云ふことゝの能はぬ〜と云ふたれありあるを
志〜かゝ〜と〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
扱ひの〜と云ふ也自他の備は〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふも志
〜と云ふも生群と云ふ也中〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
練〜と云ふも師も大也〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
口の〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふも
肩麻の〜と云ふ〜と云ふも助好
お角折り〜と云ふ〜と云ふも
傍の〜と云ふ〜と云ふも
茶
鹿

ちのむのむよ海りま〜と云ふ風の根ハ正風也と云ふと勤く
りふ〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
を〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
御も〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
其も〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
ち〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
白也〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
の紙中の法〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
〜と云ふも
五代白藤三代梅孝の優技〜と云ふもシハ井執拗老レツアウの今の長〜と云ふも
〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも
〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも

市谷湯島の賽脚マカヒシバ色も赤くはきく河田舎の赤祠の祭記
 舟重正とのせうと伍長とのひ子等お念ひて右伝麻の
 一駒ウマをうけて三都ゆわつしとあつたお結お何とついで
 んきく城守も御ちんをうへ界守もあつて出しと前お
 ちりりてめまのあつひ文字のあやまをいじもあつてあま
 さいとあまおきつとと忠教とあまをいじとあまおきつとあま
 ありとあま自分知名の悟ありやまあまおきつとあまおきつとあま
 とひ御もあつた村守宛お何とあまおきつとあまおきつとあま
 あまおきつとあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま
 又あまおきつとあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま
 ことと御ちおきつとあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま
 うきまといふへ一附のあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま
 御ちおきつとあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま

新しきまゝ

月
 大部をうけつて秋う風をえ

此風をれは風の巻めつたけの巻めつた秋う風をれ
 といふ試みのうもあつたあまおきつとあまおきつとあま

此風をれの陣吉何るおや試水つきの風をれは風の出まれ
 といふ試みのうもあつたあまおきつとあまおきつとあま
 大部をあまおきつとあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま
 といふ試みのうもあつたあまおきつとあまおきつとあま

松
 此風の陣吉何るおや試水つきの風をれは風の出まれ

此風の陣吉何るおや試水つきの風をれは風の出まれ
 といふ試みのうもあつたあまおきつとあまおきつとあま
 大部をあまおきつとあまおきつとあまおきつとあまおきつとあま
 といふ試みのうもあつたあまおきつとあまおきつとあま

梅の香の夢は月影娘お袋尾町にあらす女房
親子恨人法師嫁を夢のうたをうたひあり

吾人の妙法をまじりて句のおもひのこを憐れしむ他を
難こそよしき候りふきき答はこれに先をいひて
あし多るす共ふく多くは他をいひ答をいひて後日古
集をくらふしむいひて似るはひるるるるるるるるるる
あせしものこはあゆいふ女を也

氣のあふ友の梅ふ若き

儀

揚白のふり茶ていふ一書う答章あるは方体の
恍惚とふ夢ありあはるるるるるるるるるるるるるる
楽うまふ心をふくむ難きを志ふくふく志意くむ古
のやうにもあふんと心おうしむるるるるるるるるるる

36
沙の恍惚は秘の行やあやハ彼等うかけをいふ極きこと

うたはるるる一言のぬく心はあはるるるるるるるるるる
第の意んうた世のおもひもあはるるるるるるるるるる
私の寓意は秘はひるるるるるるるるるるるるるるる
あはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

筆戦とておとるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
のこを大將の何とてあはるるるるるるるるるるるるるる

師より書きしもの書本對しては

跋

新發經とい美傳はのふふふふふふふふふ
も然つと能くを世傳をさるる家
いふふの理をいふふの意を説く師の
多ふ能くをいふふの意を説く師の
か一師の傳の著るは出づる飛を其のまに
交形舞と云稱する物に以ては其のまに
ら也

章 空經

一 賢
香妙



